



1996.10 ~ 1997.4

病気をして、もっとも気を使うのが食事です。私の場合は胃潰瘍もあるので、油とぴり辛がいけないのです。濃い味付けも受けつけません。萩窪駅のすぐそばに、「グルッペ」という自然食レストランがあります。下が食料品店になっており、日、月曜日の定休以外は毎日利用させて貰っています。今や、この店なしに私の食生活は成り立たないほどであります。社長をはじめとして、従業員の皆様にも、貴重なアドバイスや温かい配慮をいただき、感謝の念にたえません。

さて、去年の七月四日を第二の誕生日としますと、やっと一歳になったばかり。六月からの「萩窪便り」を振り返ると、甘えた面ばかりが目について仕方ありません。これもまた自分の姿なのだと受けとめて、これからはもう少しだけ強くなりたい。

田口女史の忠告に従い、この夏は「萩窪便り」を休刊し、元気に乗り切ることに専念しました。大淵兄、大山記糸夫氏、毛藤夫妻、倉橋氏にも励ましてもらいました。本当にありがとう。これからは「新・萩窪便り」です。

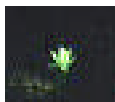


中尊寺の能楽堂

これは、月の光に映し出された能楽堂である、と言いたいところだが、残念ながらそうではない。ぼくがはじめて所有した中古の一眼レフの、自動露出計が狂っていたにすぎない。中学、高校時代には、叔父さんのペンタックスを首にぶら下げて被写体を探し歩いたこともあり、自分の単純な露光測定には多少自信を持っていた。(馬鹿のひとつ覚えではあるが)。しかし、中古とはいえ、世界に誇る日本のカメラ。ちょっとおかしいのでは、と思いながらも機械のメカの方を信用してしまった訳である。

かくして、ぼくの最初で最後の写真旅行記は、ほとんど闇の世界におおわれ、滑稽な夢の記録と化してしまった。真っ黒でなにも写っていないものは破棄したが、すこしでも光が見えるものは大事に保存してある。とても捨てられるものではない。まあ、迷惑かもしれないけど、あと2枚お見せしましょうか。

蓮の花



毛越寺浄土庭園



訪れたときは陽の光が実に気持ちの良い午後であった。

盛岡から平泉まで戻る車中、扉の窓に中尊寺が現れるのを目にした老婆が、しずかに合掌していたのを覚えている。

* このフォトはライトボックスを利用し、スライドをスキャナーで読みとったものです。



紅葉しはじめの頃の善福寺公園である。今日もひとりで、ゆっくりと歩いている。こんなにいい日なんだから、あの人を誘いたかったな。チャンスがあったのに、いつも後で気がつく、とすこしだけ悔やむ。「あの人」とは、いつものお店でお会いすることのある、素敵な女性である。

水鳥が、みずかきを飛行艇のフロートのようにして、つぎつぎと着水してくる。(失礼、水鳥のほうが飛行艇よりもはるかに、はるかに先輩でしたね)。水際で幼い子がよろこんでいる。

都会の自然だって、生きているんだから、こうやって歩いていれば十分いい気持ちになれる。

あと10日もすれば、もっと綺麗に色づくだろう。

そして、十日後。



この紅葉は十和田湖のものと変わらないいうつくしさだ。

東京から出られない身だから、余計感じてしまうのかしら。もう2年も帰っていないふるさと。八幡平の毛氈峠と一緒に歩こうね、と母と約束した少年の頃。母よ、かならず行きますよ。

帰るところがある、それはありがたいことだ。ベットに横になり、四角い天井にむかってつぶやく。帰りたくても、帰れない人がいる。帰るということを、忘れてしまった人もいる。祖国。ふるさと。家。そして、自分自身。

むかし、新宿でぶらぶらしていた頃、知り合いがよく言っていた。
「あいつ、行ったきり、戻ってこれなかったのさ」

もう帰ることはないかもしれない。そう覚悟して、国を出たり、ふるさとを後にしたり、家を出たりすることもあるだろう。たとえ、どんなに辛い日々がつづいても、自分自身があれば大丈夫だ。そう信じて。



1985年頃のフィルムから

鳥が帰る
大地に帰る
空から帰る

水に帰る
海に帰る
空に帰る

帰るは還る
帰るは還る

いつの間にか、頭痛もかるくなり、このぼっかりとした光景を前にして、帰れるってことはいいな、とまた呟いてしまう。



1985年頃のフィルムから

はじめて始祖鳥の化石を目にしたとき、＜ココニ、ワタシノ骨ノ フルサトガアル＞と、そう直感した。

われわれの脳の記憶の層には、はじめて存在した生物から人類にいたるまでの、気の遠くなるような連鎖の痕跡が、螺旋状に残っている。

小鳥が話しかける、動物と心がかよいあう、と誰かが言うのを聞いても、ごく自然にとらえているところがある。

むかし、友人がカナリアをつがいで飼っていた。ある日、片方がカラスに襲われたのだが、残された方が、半分眠っていたわたしの耳元で、なにかをうったえていた。はっと目が覚めたときには、最後のことば以外、どうしても思い出せない。あの日から間もなく、残った方も猫に喰われてしまった。

鳥が残した最後のことば、聞きたい？

ごめんなさい。謎は残しておきましょう。

そのかわり、男なら誰もが願うシーンをどうぞ。

「私は、あなたが待っていた女なの。これからは何も怖がることないわ。いつも私が一緒。手を伸ばせば、私の手がすぐそばにある」

* 映画「世にも怪奇な物語」の第3部、F・フェリーニの作品から。

押入の書籍を整理していたら、奥の方からフィルムが数本出てきた。透かしてみると、どうも二十年ほど前のものらしい。スキャナーで読み、反転させてなんとか見られるようにする。すっかり忘れていた。懐かしさのあまり、思わず声を出してしまった。



Hiromu & Sam

二十歳前後のおとうとたちである。十和田湖の展望台で撮ったものに違いない。わたしの何枚もある。しかも、彼女とならんで。いやはや、いやはや。もう時効かもしれないが、公開は控えさせていただくとして、日傘を手にした彼女は、じつにあかるく、ふっくらとしている。それに、とてもきれいだ。わたしはといえば、長髪、ちょび髭、ラッパがたジーパンによれシャツ。思わず苦笑してしまう。

彼らを撮っているのは、わたしである。彼らは、わたしを見ている。

新・萩窪便り No.6 は、ふたりのおとうとに捧げよう。



1985頃のフィルムから

* 今年の2月に書かれ、投函されなかった手紙

芝居の案内状を送っていただいてありがとう。お二人とも、やってますね、というのがとても嬉しい。なんとか行きたいのですが、不安もあるのです。

ぼくの病気については大山氏から聞いていますか？

昨年5月に秩父で会った時も、かなり体調は悪かった。ぼくの愚かなところは、すぐ医者に診て貰わないこと。7月のはじめに救急車のお世話になってしまい、危うく命綱の切れた宇宙飛行士になるところでした。無くなっていく意識の闇に浮かぶ青い地球。そのゆっくりとした回転に合わせていろいろな言葉が、脈絡もなく、剥がれおちていくのです。あっ、死の入り口か？しょうがねえな、これで最後とは……てな具合。

病名は肺炎による呼吸不全。

日は息と言います。細くながく生きるためにはどうするか、いまは試行錯誤の毎日。遅かれ早かれ誰もが経験することですから、今を楽しく過ごそうと努めています。先月の20日付けで会社は辞めました。しかし、まだまだ人間すてたものではありませんね。短時間ではありますが、オチンチンも使用可能だし、ちいさな明かりもなにかを照らす力になるかも知れない。まあ、暫くぼんやりするつもりです。

おふたりともお元気で。いい芝居つくってください。

H & Y 様

まだ春の见えない荻窪にて 柊

今年になって、もう3、4回公演しており、そのたびに丁寧に案内状を送ってくれる。ありがとう。

新・萩窪便りNo.4で、「帰る」という言葉をくりかえし使った。ところが、時間が経つにしたがって、なんだかすっきりしない負荷が、この言葉の周りにくっついてきている。何故なのだろうか。

最初、ぼくは「自然に帰る」と書いたが、何度か読み返すうちに、この言葉に対してある違和感を感じはじめた。それでこれを削除した。ないほうがよっぽど気が楽になる。

一枚のフィルムを使用した。深夜の蛞蝓（なめくじ）である。乾いたアスファルトの上を移動している。

本当は、なぜ？とか、どこへ？とか、そんな問いは必要ないのだろう。

ぼくが蛞蝓を写し、そのフィルムをここに見える形で置いたに過ぎない。

書籍の間から、忘れていたネガが出てきたに過ぎない。

1985年頃と時間をしるした。

1969年の春上京し、1995年の7月まで、ぼくは自分の時間を厚い殻のなかに閉じこめてきた。

これからは時間をしっかりとタイプするつもりだ。

都美術館でCINDY SHERMAN 展を見てきた。やはり、写真集とは違う。全く違う。二十年という時間の、九十枚の切り口。そこから滲み出てくるものを、しずかに舐めるようにして、歩いた。心地よかった。友人の、「どうだ、おまえのミュウズの女神は」という声に対しても、ただ軽く頷くことができただけであった。「一縷のかすかな光が、乳首に差しているのか、あるいは、乳首から放たれているのか分かりませんが、濃い液がたれていましたね。見ましたか」? と言うと、彼はあわてて引き返し、戻ってくると、「さすが、おっばい聖人」と笑った。

がらくたばかりのクソ頭。散らかしほうだいの、能なし、とまで言いたくなる。一切れのメモ用紙に日付を入れなかったことが、こんなに悩む要因になるとは。方南町、芦花公園、西大久保、中野新橋、阿佐ヶ谷、東高円寺、高円寺南、本八幡、新井薬師、西船橋、そして荻窪。じっくりと思い返してみると、どうも高円寺南あたりから時間の記憶が狂いはじめているようだ。天沼教会の裏手に住んだのが、1978年。それから、取り壊されるまでの2年間いたわけだ。教会通りを歩き、東西線に乗り、しばらくは大手町まで通った。年金手帳を見ると、昭和五十二年十一月とある。この時は、まだ西船橋だ。満員の東西線から江戸川の川面を眺めていたのだから。とすると、翌昭和五十三年に荻窪に越して来たということになる。何月だったろうか。春か、夏か？ 次郎柿はひと秋、枇杷はふた夏食べた。庭に大きな木があって、好きなだけ食べられた。水がうまかった。地下水をポンプで汲み上げていた。よく牛尾のスープを煮た。そんなことはどうでもよい。このメモ用紙が、昭和五十三年なのか五十四年なのか、朝刊なのか夕刊なのか、いつの報道記事なのか分からないのだ。唯一の手がかりは、第一面だという記憶。これを頼りに図書館で調べるしかあるまい。

第二の手がかり。大手町を辞めてから、一年近く求職を続けたはずである。とすれば、新聞は朝日。やっと決まった次の就職は確か、二十九歳の十二月。つまり、1979年。この年をまずあたってみよう、と杉並中央図書館に出かけた。

壁一面の縮刷版。文庫本を読むのが辛くなっている眼には、たまらない。イラン地震で2万5千人死亡。「オリーブの林を抜けて」の舞台がここにあった。「ピロスマニ」の紹介記事。ぼくがもっとも感銘を受けた作品のひとつだ。「俺が何を求めた？俺は何も変わらん。今まで通りやる」。ピロスマニの言葉だ。おいおい、疲れるんだから、さっさと調べろよ！

床にべったり座り込んで5冊ほど見た。頭の中で風の音がする。きょうはもう止めよう。何を調べようとしているのかって？ それは、探し当てた時に申し上げます。

「オリーブの林を抜けて」は、アッバス・キアロスタミ監督の自主映画作品。また、「ピロスマニ」はグルジャ映画で、監督はシャンゲラーヤ。

1996 年 12 月 25 日(水)

新・荻窪便り No.10

今まではノート型パソコンを使用していたこともあり、home page上のtextを読むことに対して、そんなに辛いと感じたことはなかった。しかし、最近事情が違ってきている。12ポイントの字が雑踏のごとく並ぶ画面に出会うと、目が悲鳴を上げて、いやいやをする。新聞の縮刷版、文庫本なども同様に、手に取っただけで戸惑いを覚えてしまう。3段組みの文学全集や、こまかい字が満載の本や辞書が、なんとなくたのしさを長く味わえるような気がした頃もあったのに……。歳のせいにはしたくないな、と何処かでさびしい声がする、今日この頃。

<Hiiragi's News>

Half a Million Iraqi Children Died from Sanctions <TehranTime 12/05/95>

112 対 157

中絶された胎児が112万に対し、出生児が157万。これは記録上の数字であり、実際の中絶数は300万と言われている。勿論、母性保護法（優生保護法が昭和23年改め）施行後間もない日本のことである。「これによって人口増加が抑制され、戦後日本の繁栄を大きなものとしたのである」とは、ある人の弁。しばし、絶句。NHK 教育TV 12月24日放送。

祖父の誕生日

あと3年で、祖父の生誕百年。父も、ぼくも寒い季節に生まれたから、3代続いたことになる。曾祖父の生まれた月は、誰も知らない。幼い頃の記憶では、曾祖父は酒が大好きで、気前もよかったらしい。お陰で、畑がだいぶ酒代に消えたという。嘘かまことか。祖父は若い頃、樺太で樵をしていたという。二十一の時十五の嫁を貰った。祖母である。

新・荻窪便り No.11

1997年という新しい年を迎えた。いくつかの夢の余韻のなかで、ぼんやりと横になっている時間が多い。

整理中の書籍から数冊枕元に持っていき、数頁読んで疲れて目をつむり、朦朧としたながい状態の後ではっと目を開ける。そんな繰り返しの数日である。

暮れに食料品は揃えておいた。お節も近くの割烹料理屋につくって貰った。毎日餅を焼いたり、雑煮にしたり、美味しくいただいた。

2日、近くに住む船坂氏が娘さんと一緒に来てくれた。おませで、素敵な十一歳。生まれたばかりの彼女も本当にかわかった。彼の紹介で、王家衛 (wong kar-wai)監督の映画を2本観る。

4日は、大山、倉橋両氏と、室野井女史が午後から来てくれた。彼女は今春訪欧するらしい。彼女の舞踏が広く世界に認められることを願っている。以前、天沼陸橋下の離れで彼らと過ごした時間が、こうして今も生きている。つくづく幸運だと思う。

そして今、いくつかの夢の中のひとつに、ぼくはつよく惹かれている。

乳母車が落ちていく、あの、石の階段を覚えているだろうか？「戦艦ポチョムキン」のワンシーン。この石の階段を想像していただきたい。

紙袋を持った中年男が階段の上で、「倒れる」ことを予知する。そこで、彼は倒れる前に尻餅をついた。被害が少ないと直感したのですね。衝撃とともに石段を滑り降りるが、あと4、5メートルの所で脇から地表にたたきつけられてしまった。すると何処かで見えていたかのように、3人の女性が駆け寄ってきたのである。肉体の苦痛を感じる前に、女性たちの突然の出現に彼は驚いていた。右側の女性が彼、いや、ぼくと言ひ直しましょう、ぼくを助け起こし、ぴったりと寄り添ってくれる。彼女と視線が合う。彼女の存在感がふかい安堵を与えてくれる。彼女がぼくの腕をとる。ぼくはその手をやさしく包む……。

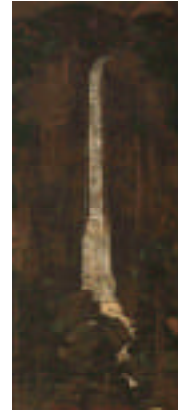
ぼくは夢分析はあまりしないようにしている。とはいっても、夢の記憶にふかくひきずられ、苦しい思いをするときは多い。最近のぼくは、夢を資料と考えようとしている。それを組みかえたり、不要なところを無視したりして、あたらしい自分の像を描くのである。ひとつの夢にあまり拘らないようにする、と言った方が正確かもしれない。夢の中の3人の女性。それに、過去、現在、未来と意味づけをしてみたい誘惑にかられる。勿論、ぼくの腕をとってくれているのが、未来の女性である。

1997. 1.18

新・荻窪便り NO.12

先日、NHKの日曜美術館で、根津美術館所蔵の「那智瀧図」を見た。それ以来、ときどき額の奥から、すーと幽かなひかりの帯が流れ落ちているような、そんな気がすることがある。

去年の秋、紅葉のもっとも艶やかな十月の半ばに、母は故郷の滝めぐりをしたという。正月の餅と一緒に、そのパンフレットを送ってくれた。「日本の滝百選」にも選ばれている名瀑が、ふたつある。「七滝」と「茶釜の滝」である。「茶釜の滝」は落差100m、幅15m。夜明島渓谷の奥深くにあり、かなりの難所であるという。この滝の写真だけ掲載されていないのは、そのせいであろうか。ぜひ、目にしたいものである。今朝は、4時頃からぼんやりしていたが、目を瞑っていると、不思議と滝の音が聞こえてくるような気がした。小さい頃、夜明島の清流で鯉をとって遊んだ。あの、踝を冷たいひかりで照らすような水が、夜が明ける前の天空から注がれたものだとは、つい今まで知らなかった。



1997. 1.19

新・荻窪便り No.13

映画「風の丘を越えて—西便制—」を見た。脚本キム・ミョンゴン、監督はイム・グオンテクである。また、泣いてしまった。パンソリの歌の魂に、はじめて出会った。

" 澄んだ声だけでは人の心は打てない "

" 恨（はん）を積むことは生きること "

" そして情念に埋もれず、恨を越える声を出すこと "

ぼくは「白鳥扼殺者」の作者の言葉を思い浮かべた。

" 人は歳をとると憎しみを忘れる "

これは警告である。不当な苦しみを受けながらも、生き続ける炎であるもの。
この映画のラストシーンは、人の結びつきの、最も美しい瞬間が流れている。

新・荻窪便り NO.14

3日後に目が覚めたとき、ぼくの上は集中治療室の天井であった。その間、ぼくは何処を浮遊していたのだろう。最後に眺めていたのは、遠のいていく地球、いや、闇の奥に帰っていこうとするぼく自身だったかもしれない。

四角い扉のある天井と、同じように四角いベットのぼくは、位置関係が始終反転した。つまり、ぼくの下に天井があったり、墓標のようにもうつったのである。

一番最初に浮かんだことは。それは、ぼくが初めて欲した、「自分の子」という呻きだった。そして、不眠の一週間の半分を、「初めての子」の名を付けることで生き延びることができた。

あとの時間は、妄想の扉から出てくる、「炎の虎」との戦いだったような気がする。

鼻腔から気管支へとカテーテルが入り、声は出ない。すぐ目の前に見えているのに、世界はカプセルの外だ。

こちらからの発信手段は、コールボタンか執拗な目線。あちこちで、看護婦が問いかけている。

「お名前は」？

「お子さんは何人」？

「お幾つ」？

「奥さんはいるの」？

.....。

なるほど、これは「天上からの糸」ならぬ、地上からの呼び戻しのサインだな。

若い看護婦が、「洗淨」を楽しんでいる。

薄紅色の蓮の花が開いて、悦びのうずきが、遠い、遠いところからゆっくりと伝わってくる。

消毒液のひと濡らしが、水紋のように、此岸にとどくまでには、あらかた幻になっている.....。

1997. 2.13

新・荻窪便り No15

荻窪の古書店 T に久しぶりに顔を出す。奥さんが笑顔で迎えてくれた。

この春に郷里へ帰ることを告げる。途端に、

さびしそうな顔に変わり、すこし困ってしまった。ありがたいことだ。

入り口に、岩波書店「魯迅全集」が積んである。畑仕事の合間に、じっくりとつき合うのもいいな。『故郷』というのは、どんな作品なのだろう。

『ハーブとスパイス』のフェンネル（英名 Fennel セリ科）の頁に、唐代の詩人賀知章の「回郷偶書」が紹介されていた。フェンネルの和名はウイキョウ。中国語では「茴香」というらしい。魯迅と賀知章は同郷であり、魯迅は上海で客死し、賀知章は老いて役職を捨て、郷里で隠棲したと聞く。

もとより、ぼくはただの田舎者であり、病を得て郷里に帰るに過ぎない。

1997. 3.13

新・荻窪便り No.16

啓蟄のあたりから、体調が少し狂いはじめたようだ。
春先の気候が、思いのほかこたえる。

「わたしは老いた雑草だ。刈られても、刈られても、頭をもたげる」

映画『ライムライト』のことばである。

勿論、ぼくは老いてなどいない。しかし、ほかの名句よりも、この方が今の心境に合っているのだろう。実は、自分自身でも驚いているくらいだ。

以前、ある夢について語ったことがある。夢の内容を、自分で組み替えたりするということ。ぼくは今、その必要性をつよく感じている。

夢は一種の баланサーではないだろうか。

心身が均衡を維持できない状況に陥ったときの、さまざまなシグナル。無意識の深層部からだけではなく、意識的な部分からもつくられるもの。

意味づけ？ 必要ない。ただ選択するだけだ。

苦痛を取り除くために。

しかし、面白い。同じスクリーンを見ていても、ひとり、ひとり、心に残るものが違う。あたりまえのことが、なんでこんなに興味深いのか。そして、なぜ誰かに聞いて貰いたくなるのだろう。

1997.3.20

新・荻窪便り No.17

ぼくは「戀」という字が好きである。
ひとの触れ合いが、もっとも美しく文字化されたひとつに違いない。
想いが蜘蛛のように糸を紡ぎ、ことばの滴をつらぬいていく。
薄明に一瞬、無数の珠が煌めくのだ。

そして、「心」という礎が、今、とても大きなものに見える。
まるで、高度数百キロから眼にする、地球の存在のようだ。

しかし、ぼくは次の字も忘れない。
「怒」と「恐」である。
奴隷も、鑿（のみ）を手にする者も、おなじ心で生きている。

「ことば」は「剣の先」という意味もある。
糸が切れることは、死を意味する。

最近、ある人が嘆いていたのを思い出す。
「なぜ、うつくしい漢字をなくすの」？

この問いには、深いものがある。

1997. 3.25

新・萩窪便り No.18

「風櫃の少年」を見た。

故郷を逃げるように出た少年達。都会の環境に、戸惑いながらも順応していく。未来は茫洋とした海のごとく目の前にあり、好奇心も、刺激も、分別も、生命力のある根からのびている。彼らをしっかりと歩ませるもの、それはなんだろうか？ それは自分の記憶の中にある、だいじな部屋。それは愛と出会ったときに花ひらく、蕾のようなもの。

それは緑夏樹のように広がる、清冽なハルモニー。

確かに、今のぼくにもある。勿論、あなたにもあるだろう。

少年のひとりが恋をしている。愛する夫（ひと）を失いつつある、年上の女性に。スクリーンは、この恋の行方を暗示している。

海はつねに動いている。変わらないのは、つねに動いているということ。

恋の行方は、ひとりひとりの時間の中に生きている。

心地よい波のように、

繰り返し、繰り返し ……。

1997. 4. 5

新・荻窪便り No19

ぼくは苔の明るい緑が好きだ。

その、天鵲絨のような記憶を辿っていくと、幼い頃の庭が見えてくる。

辺境といえる土地の、重く、湿った屋根の下。家のどの戸を開けても、陽の光は届かなかったような気がする。暗闇の向こうに輝く、小さな戸口。大きな桜桃の木の下で、祖父が馬の毛を梳いていた。萌える苔が縁取る庭先には、梅や柿の木、それに桐の木など。桐の木は、女の子が生まれたときに植えられる。男ばかりの兄弟に何故？と疑問を持たなかったのが不思議だ。池のそばには菖蒲が群れ、葡萄の木があり、コスモスがたくさん揺れていた。熟した果実の核を割ると、指の先で何かが弾けて濡れた。

どうしたのだろうか、こんなにたくさんの花が見えてくるなんて。



この写真は、善福寺池のボート乗り場近くで撮ったものである。明るい緑の苔が、桂の樹皮を被っていた。うっとり眺め、指先で軽く触れてみる。この柔らかく湿った冷たさは、身体の何処かで記憶しているものだ。それこそ、遥かに遠い日のこと。

しかし、その日以来何度もこの木を訪ねたが、再びこの苔が輝いているのに出会っていない。何故か、いつも黒ずんでいた。ぼんやりしていると、苔のもつ必然と偶然、ぼくのもつ必然と偶然が、一瞬何処かで交わったのかしら、とたわいもないことを思ったりもする。

郷里に来てから、ちょうど一週間が過ぎた。

春という季節を、北に600キロ。僅か7、8時間の走行で、ひと月分の時間を遡ったことになる。北上するに従って、両側の風景から淡い春の色が失せていくのがよく分かった。

道の奥。世阿弥が『錦木』の冒頭で書いていたように、これから「隔てられた」世界に行くのだ。にぶい灰色の稜線から上は、仄かな光が滲んでいて、異次元への歪んだ入り口のように映った。運転する友人に語りかけると、彼も頷き返す。彼の血の中にも、北の湿原の記憶が濃く受け継がれているのだ。

ぼくは故郷に帰って行くのではない。別の世界に移りつつあるのだ、という気がしていた。

確かに、ぼくの生まれた土地ではある。風景も、人々も、遠い記憶の何処かで微かに反応する。しかし、ここは故郷と呼ばれている、全く新しい土地だ。そのことを、あらためて実感している。懐かしさも、親しみも、胸に浮かんでこない。自分の育った家の2階で寝起きしていても、目に見えなかった呪縛が、少しずつ貌を顕してくる。



米代川

ぼくには、同じ故郷を持つ友人がいる。

同じ年に生まれ、お互いの産声をあげた所は10歩と離れていない。

ぼくらが上京した年。人生が、新しい時間を刻み始めた年。自分のための四肢を意識し、幾層もの時間の流れを持ちはじめた年。自分という人間に、名前を与えた年。光と闇が渾然と溶け合う瞬間に、悦びを感じた最初の年。

しかし、帰省列車の空間が、故郷に近づくにしたがって捻れていくような不安を覚えたのは、何故だろうか。療養中のぼくを見舞ってくれた彼も、同じ様なことを言っていた。手足が、言葉が、昏い意志のようなものと結びついて、自由がきかなくなっていく。

胎児への逆行のイメージだ。

北上する列車も、ハイウェイも、異次元の空間と時間が混淆しているのだろう。その深淵を覗き込んでいると、首根っこを掴まれ、何処かへ連れて行かれそうな眩暈を覚える。